

古典的ケース 22 周期的な発作で衰弱した男性

P.D 氏、56 歳。3 年ほど前から不調。2 週間おきの発作が続いている。

その期間は、ほとんど、暗い部屋のベッドに寝た切り。

衰弱が激しく、何かちょっとしたことをするだけで弱ってしまう。

光にも音にも耐えられない。頭部は熱いが、手足は冷たい。

表情は苦しそうで、病的。発作がないときでも、不安が強く、夜は眠れない。

両手足に、震えとひきつり。

人がそばにいるのを嫌悪したが、一人でいることも恐れていた。

これらの症状は、旧来の医学、ホメオパシー、オステオパシーの治療で好転しなかった。戸外で運動することをすすめられたが、それも効果がなかった。

1919 年 3 月 18 日、PD 氏は、Miss.Barnard のもとに訪れた。

綿密な診断の結果、XXX3X に決まった。

最初 2 時間おきに投与した。

2~3 回で改善が見られたので、3 時間ごとに。

その後、1 日 2 回、2 日に 1 回、3 日に 1 回と投与数を減らしたが、好転は続いた。